墓制論

中村耕作

2017 年は、墓制研究の基礎となる重要遺跡の発掘調査報告書、特に総括報告書の刊行、それまで十分注意されてこなかった墓制を含む様々な基礎研究、そして、縄文文化における葬墓制の意義やその後の文化への継承などの理論的研究など、厚みのある議論が展開された。以下、評者の関心に従って、区分、紹介していく。

１．基礎研究

山田康弘[1]は、富山県小竹貝塚の前期人骨群を分析し、抱石葬が男性で、非主流派のクラスターに偏っていることに注目するとともに、安定同位体比分析によって食性が他と異なる人骨も男性とされたことなどから、男性が移入する社会を想定した。なお、小礫であっても象徴的な抱石葬とみられる事例に注意を喚起している。

青森県三内丸山遺跡の総括報告書第１分冊[2]が刊行され、土坑墓・環状配石墓・埋設土器などの概要が整理された。

濱松優介[3]は、三内丸山遺跡を中心に、円筒土器文化圏における盛土・捨て場と土坑墓・埋設土器の位置関係を分析し、両者が重複する事例がしばしば認められることから、特定の場所性に関わる事項と位置付けた。但し、両者の新旧など関係性は多様であることも指摘している。

坪田弘子[4]は、東京都・神奈川県における十三菩提式期～五領ヶ台式期の土坑墓から土器が出土する事例を集成し、逆位の土器被覆葬や、正位・横位の副葬事例について器種や打ち欠きなどを整理した。大歳山式や北裏Ｃ式など他地域の土器が加わっている点が注目される。神谷原遺跡など環状集落に関わる重要な時期でありながら、十分検討されていない中での基礎的データとして重要である。十三菩提式の広域分布や、五領ヶ台式内部の系統差など、土器研究の視点からはさらに広範囲での位置づけが期待されるところである。

太田圭[5]は、西関東・甲信地域の中期・後期の埋設土器を集成し、屋外事例を中心に基礎的な属性の集計を示した。特に、検出位置を、広場や住居域との位置関係、あるいは住居近接 / 住居集中域外 / 住居址覆土 / 住居域外（土坑・配石近接）/ 住居域外 /（遺物集中区）/ 近くに遺構なしに区分するなどして、埋設土器の機能の推定を試みている。屋内事例や他地域に比して、関東甲信地域における屋外事例はこれまで体系的な研究に乏しく、今回示された「指標」「墓」「祭祀」「送り」などの解釈にはなお慎重な検討を要するものの、まずは、一定の傾向を示したことは重要な成果である。

千葉県加曽利貝塚では過去の調査記録を精査した総括報告書[6]がまとめられ、その後特別史跡の指定を受けた。人骨については 233 体に新たな整理番号が付与され、詳細なデータシートが添付されるとともに、出土状況についても再整理が行われた。必ずしも整備されているとは言い難い膨大な記録が整備されるとともに、新たな分析・再検討が加えられた重要な成果である。

加藤元康[7]は、墓の認定基準を考慮した上で新潟県における墓制資料の集成を行い、諸属性について時期ごとの変遷をまとめた。一覧表や主要資料の図面が示されており、当該地域の墓制研究の基礎資料となるのみならず、特徴的な事例の多い甕被葬について丁寧に整理されている。

長野県では茂原信生・川崎保[8]によって県内各時代の人骨データがリスト化され公表された。

神奈川県称名寺貝塚は、著名ながらも遺構の詳細が不明瞭であったが、本年Ｄ貝塚において９体の後期前葉の人骨が出土したことが速報されている[9]。

秋田県大湯環状列石の総括報告書[10]では墓域を中心とする理解を示す一方、土器型式別、石器器種別の分布図が提示され、環状列石を含む遺跡全体の性格を検討する基礎資料が整備された。

藤原秀樹[11]は、総論が提示されていた（注１）北海道の周堤墓について、各遺跡の詳細な属性リストと検討結果を公表した。周堤墓以降の状況も含めて階層化問題を主題としているが、議論の前提としてこうした墓制変遷の過程を具体的に跡付けることが重要である。

青森県五月女萢遺跡の報告書[12]が刊行され、晩期中葉～後葉を中心とした墓坑群の位置関係・マウンド・副葬品等の変遷がまとめられた。

本年刊行された総括報告書の中でも、複数機関

の調査が繰り返され、もっとも実態が不明瞭だったのが愛知県保美貝塚[13]であろう。様々な制約の中、単葬75・集骨60～65・土器棺20の情報が整理された。本遺跡では山田康弘らの学際的研究も進められており、その成果と合わせた総合的な成果が望まれる。なお関連する展示も行われたほか[14]、本稿で取り上げた総括報告書で唯一インターネット上での一般販売の紹介がある。指定史跡の報告書の一般公開はさらに積極的に進められるべきであろう。

２．特徴的な墓制

配石墓と核家屋

2017年に比較的多くの分析が行われたのが配石墓とそれに関連する遺構群である。

青森県では水上(2)遺跡[15]で後期初頭の累積する配石墓が報告された。関東では群馬県滝澤石器時代遺跡[16]、神奈川県川尻石器時代遺跡[17]という指定年代の古い史跡の総括報告書で、長期継続する集落内での後期中葉の配石墓の位置づけが図られた。同じく古くから知られた配石墓である東京都田端環状列石[18]の正式報告書も刊行された。墓坑・配石部分に関しては概報の記述が踏襲されたが、晩期の大形土偶が復元されたり、中期集落に関する情報が新たに提示された。

『月刊考古学ジャーナル』では配石墓の特集が組まれた。阿部昭典[19]による研究史を踏まえて現状を整理した総論と、永瀬史人が東北北部[20]、大工原豊が群馬県[21]、小森明美が神奈川県・東京都[22]、櫛原功一が中部[23]という各地の様相を整理した各論からなる。阿部は総論の末尾で、「より体系的な形態分類の整備や地域間の関係性を解明していくことが課題である」と指摘する。「配石墓」・「石棺墓」の用語１つとっても統一的ではない現状においては当然のことである。一方で石を使った墓は人類に普遍的なものであり、縄文文化においてもその系統性は未解明である。こうした状況下においては、まずは統一的分類ではなく、阿部が近年の動向として挙げた「形態的地域性」すなわち「○○型配石墓」の積極的な認定が重要な意味を持つであろう。本特集でも各地で実態に合わせた分類が示され、変化が叙述されている。阿部の指摘した課題は、これら地域・時期に応じた各類型を、地域を超えて連関させるためのものであろう。後述のように新たな調査事例も増加しており、今回扱われなかった東北南部～新潟県の様相を含めた広域的視野による再検討が望まれるところである。また大工原は報告書に掲載されている時期が幅広いものについては、改めて出土土器を検討した上で時期を絞り込む必要性を指摘している。

阿部友寿[24]は後期以降顕著になる特定住居と墓群の接近についてまとめた。また石坂茂[25]も群馬県横壁中村遺跡における核家屋と墓群の変遷を整理した。阿部や石坂が検討した神奈川県や群馬県では現在も重要資料の調査が進められている。小森も紹介した子易・中川原遺跡を含めた新東名建設に先立つ神奈川県西部（伊勢原市・秦野市）の発掘調査、八ツ場ダム建設に先立つ調査などで多数の配石墓群が検出されており、近接して敷石住居が検出されている。こうした状況をふまえ、第44回考古学研究会東京例会では、「縄文時代の住居⇔墓⇔祭祀場」を特集し、阿部友寿の基調講演、野坂知広による子易・中川原遺跡の報告を行い、多数の関係者の来場を得た[26]。特に議論が集中したのは、重複事例における継続／断続の判断や、それぞれの厳密な時期認定の必要性である。今後の調査において遺物の出土状況の精緻な記録とともに、年代測定や土壌のリン酸分析、同位体比分析など期待したい。

山陰地方では、青木和寛[27]が土坑を伴う配石遺構について整理した。特に堅果類を伴う貯蔵穴と人骨を伴う墓坑の土坑規模や配石方法を基準にした区分モデルを提示した点は、今後の研究の定点となろう。

完新世初期の洞穴・岩陰墓

沖縄県白保竿根田原遺跡の確認調査報告書・総括報告書[28]が刊行され、PDF公開されている。特に、論点として旧石器時代の人骨の「埋葬」の可能性が挙げられている。また、同遺跡では最低３体の完新世初期の人骨が検出されている。

1960年代に調査が行われた長崎県岩下洞窟の人骨群については最新の人類学的鑑定[29]と年代測定・同位体比分析整理が行われた[30]。

大学の学術調査では、群馬県居家以岩陰遺跡の速報展示（注２）および愛媛県上黒岩第２岩陰遺跡の概報[32][33]で早期人骨の出土が速報された。今後の詳細な報告を待ちたいが、遠部慎[34]は従来押型文期とされてきた装身具を伴う上黒岩人骨群

が早期後半に位置付けられる可能性を指摘している。

フラスコ状土坑墓

峰村篤と渡辺新[35]は、千葉県根木内遺跡のフラスコ状土坑出土の幼児骨を再検討し、埋葬姿勢の希少性、空隙環境下での骨の移動を指摘した。また、同人骨の同位体分析が行われた[36]。

新潟県では、今井哲哉[37]がフラスコ状土坑のライフヒストリーを検討し、土器（片）や礫を用いた廃絶段階の行為、埋没中・埋没後の掘削を伴う諸行為など様々な人為的行為の存在を指摘した。この中で甕被葬を示唆する土器や、耳飾の出土例を墓坑転用の可能性のあるものを指摘している。

中期の大規模集落と考えられてきた茨城県滝ノ上遺跡では、横位・逆位の土器や石棒その他の特徴的な出土状況が注意され[38][39]墓への転用の可能性が示された[40]。

床面倒置土器と廃屋葬・家屋墓

山本暉久の古稀記念論集において、後藤信祐と中村が床面倒置土器を扱った。後藤[41]は、栃木県内の事例を集成し、槻沢遺跡で16軒という多数の事例を持つことを紹介し、他の属性との関係から中部・西関東系習俗が導入された廃屋儀礼の一環と位置付けた。中村[42]は、東京湾岸の廃屋墓において柱脇に遺体頭部を置く事例が散見されることを確認した後、内陸部の床面倒置土器の平面配置を分析し、左奥の主柱を中心とした偏りのあることを示し､廃屋墓としての可能性を論じた。

また、同論集では、谷口康浩[43]が東京都はけうえ遺跡の柄鏡形住居内土坑や蛍沢式の壺から、東北からの再葬習俗の導入の可能性を指摘している。

東京都緑川東遺跡をめぐって多数の論考が提示された（本誌「遺構論」も参照)。このうち、中村は中央に設けられた床下土坑や竪穴の埋め戻し過程に注目した。柄鏡形住居張出部にしばしばこうした浅い土坑が検出されていることを指摘し、竪穴の意図的な埋め戻しと合わせて廃屋墓の可能性を探ったが、確定的な結論には至っていない[44]。

こうした動向の中、『国史学』で柄鏡形住居の特集が組まれ、谷口康浩[45]と山本暉久[46]が近年の動向を整理している。ともに葬制との関連について１項目設けているほか、「核家屋」や「再葬」についても触れているが、各論考の取り上げ方に両者の差が際立つ部分もみられる。

３．葬法・遺体の取り扱い

田中良之の２冊目の遺稿集として『骨からみた古代日本の親族･儀礼･社会』が刊行された[47]。「出自表示論」、「山鹿貝塚墓地の再検討」、「断体儀礼考」など直接縄文文化を扱ったものはもちろん、古墳時代における改葬・モガリなど人骨の出土状況を詳細に検討することで葬送儀礼の実態を復元可能なことを示した諸論考が１冊にまとめられた価値は高い。

田中の研究を引き継ぐ石川健[48]は、千葉県内の人骨の移動について論じた別稿の内容を改めて提示した。人骨の部位の向きや位置を正確に記録する必要性を示している。

前述の考古学研究会東京例会では千葉南菜子・渡辺新が甕被葬人骨を中心に、白骨化後の遺体の取り扱いについて新たな資料を提示した。今後の正式な論考が楽しみである。

４．縄文／弥生文化論と葬墓制

谷口康浩は既刊論文を大幅に加除筆して『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』[49]をまとめた。集団墓・大形石棒・家屋のシンボリズム・再葬などにみられる祖霊の特別な扱いを、複雑化する社会変化における統合原理と位置づけるのがその骨子である。

また、弥生時代の祭祀儀礼の源流を明らかにする立場として、設楽博己『弥生文化形成論』[50]、寺前直人『文明に抗した弥生の人びと』[51]、小林青樹『倭人の祭祀考古学』[52]が相次いで刊行された。いずれも、弥生時代に特徴的な祭祀儀礼の源流の一部を縄文時代に由来するものとしてその系譜を追う部分が含まれる。以下、これらの著書でも取り上げられたテーマを、関連論考とともに紹介する。

再葬

谷口は、縄文時代後半期から弥生時代中期にいたる中核的なイデオロギーと位置づけ、「縄文文化」の継続性についても言及している。また、国外研修の成果として、改葬人骨が出土することの多いブリテン新石器時代のモニュメントについても書き下ろし、社会変化の速度・労働量・金属製品という相違点、初期のモニュメントが集団墓と

して構築されたこと、遺体の二次的処理が発達したこと、墳墓と住居が共通のレイアウトを持つこと、モニュメントが継続的に使用ないし改造されること、二至二分の象徴性を持つこと、稀少な威信財への願望があることという共通点を指摘した。なお、英国の記念物については松木武彦による縄文・弥生墓との比較を含めた案内がある[53]。また、谷口は前述のように柄鏡形住居における再葬についても論じている。

小林克[54]は、櫛の象徴的意味を論じる中で、秋田県戸平川遺跡を取り上げた。報告書で礫・焼土・ベンガラ・骨片などから土坑墓の可能性が示されているが、小規模であり二次葬施設と考えられているため、周囲の掘建柱建物を一次葬施設とみなし、遺跡全体を葬送の場と位置付けた。櫛はこの遺跡の谷部から集中して出土しており、報告書の葬送儀礼説を追認している。石川県米泉遺跡や新潟県寺地遺跡の木柱列や再葬墓との関係にも言及し、世界的な「呪術逃走譚」における河川への「擲櫛」の一例と位置付けた。評者には結論の是非を判断する力を持たないが、単なる遺棄ではなく葬送との関連を具体的に指摘した点は重要である。

弥生再葬墓については、千葉県岩名天神前遺跡調査 50 周年を記念して 2016 年に行われたシンポジウムの記録集[55]と、茨城県泉坂下遺跡の国史跡・重文指定記念の 2017 年 12 月のシンポジウムの予稿集が刊行された。主要メンバーは重複しており、いずれも、縄文時代以来の再葬の系譜を重視している。特に、顔壺の系譜を、墓域出土の仮面土偶・土面に由来するものとした小林の仮面の系譜論は、上記著書に詳しい。

厚葬墓

谷口は、上記著書の中で「特定個人ないし少数者のための区画墓」として、北海道丸子山遺跡、美々４遺跡、東京都下布田遺跡、島根県門遺跡を挙げている。「特定個人墓」とは、主に弥生時代以降の集団墓から王墓形成までのプロセス・階層モデルで用いられてきた用語である。縄文社会を論じる中で、周堤墓や下布田遺跡に言及する研究者は多かったが、このモデルとの関係は殆ど論じられてこなかった。この点に関し、山田康弘[56]は中国地方の縄文・弥生時代の墓域の構造を類型化した上で、複雑化・成層化の４つの段階を改めて掲げた（初出は注３文献）。北海道縄文後期後葉のカリンバ遺跡では第Ⅲ段階まで進行していたとする一方、中国地方の弥生前期には第Ⅲ段階以上は認められないという時期・地域を超えたモデルとしての有効性を示している。

寺前の著書は、弥生時代を、北部九州の「文明」と、それ以外の縄文以来の「野生」の対峙として理解し、土偶・石棒をはじめとする後者の広範な継承を論じているが、墓制についても、後期～続縄文時代の北海道の厚葬墓（キウス２号墓を弥生中期末まで日本最大規模であり、楯築墳丘墓や西谷９号墓に匹敵すると評価する）と、弥生時代北部九州の厚葬墓を比較し、後者は大陸との関係を背景とした先進性・優位性を表現するものとして導入されたものとする。

なお、こうした抽象度の高い議論が行われる中、下布田遺跡の総括報告書[57]が刊行され、これまで「墓坑」と考えられてきた方形配石遺構内の凹みが、実は明瞭な掘り込みではないこと、周囲の配石も一連のものかどうか疑義のあることが示された。今後の史跡整備に向けて再調査が計画されているようなので、現場レベルでの詳細な検討が求められる。

先天異常

渡辺新・千葉南菜子[58]は、千葉県矢作貝塚の人骨を再検討し、四肢の筋肉の未発達、複数の妊娠出産痕とともに正中唇顎裂・口蓋裂という先天異常（外表奇形）を指摘し、土偶でこれを表現したものの存在にも言及した上で、「特殊な役割」を想定した。

５．「再生」論と「祖先祭祀」論

最後に取り上げるのは大島直行の『縄文人はなぜ死者を穴に埋めたのか』[59]である。大島はこれに先立ち２冊を上梓しており、本書も同様にユングの心理学、エリアーデの宗教学を基盤として縄文時代の造形を、再生シンボルを示したものと解釈する。本書では特に墓坑とそれに関連する土器・竪穴・環状列石を、子宮をシンボライズしたものとする。縄文時代の文化・社会観を組み上げる際に、人類学・民俗学・社会学・宗教学の先行理論を応用することは、前述の谷口・山田・小林らを含め、広く行われていることであり、大島の所説に対しても議論の余地は少ない。しかし、本書が前２著と異なるのは、1990 年代以降の脳科学や、

小林達雄・渡辺誠らの縄文考古学、レンフルーや松木武彦らの認知考古学の言説を引用する点である。一方的な観のあった前著と比べ読みやすい仕掛けだが、その多様な言説の紹介の中で「祖先崇拝」論への批判が展開されており、議論の種が撒かれることとなった。

大島は「祖先」「霊魂」「他界」などは、縄文時代には存在しない歴史的・社会的な必要性に伴って出現した観念であることを、民俗学的な言説を引用して主張し、縄文にはただ「再生信仰」があるのみという。

一方で谷口、高橋龍三郎[60]をはじめ、階層論・社会論などで縄文時代の歴史的な変化を論じる論者たちは、「祖先」を必要性とした社会が生じてきた可能性を提起してきた。山田康弘[61]も本年の『ユリイカ』の縄文特集号において弥生社会や近代社会をも例に出しながら「円環的死生観」(再生論)・「系譜的死生観」(祖霊論)の併存という自身の見解を改めて提示している。大島はそうした社会変化を想定してないようなので、これは縄文時代観の対立とも言えるが、まずは、こうした問題提起を契機に、それぞれの依拠する理論の学術用語の定義や形成過程を顧みる必要があろう。

また、こうした抽象度の高い議論とともに、縄文考古学独自の足場として、本稿１～３で挙げたような着実な資料の蓄積を図り、両者のフィードバックによって議論を進展させることも忘れてはならない。

注

(1) 藤原秀樹 2007「北海道後期の周堤墓」『縄文時代の考古学９』同成社

(2) 國學院大學博物館特集展示「発掘された縄文時代早期の人骨－居家似岩陰遺跡の発掘調査－」10/14 ～ 11/19

(3) 山田康弘 2014『老人と子供の考古学』吉川弘文館